



星合名誉教授

29.4.1 から 32.3.31 まで

星 合 正 治

三代所長・東京大学名誉教授

第2代兼重所長の後を受けて、小生は昭和29年4月1日から昭和32年3月31日までの3年間、当生産技術研究所第3代所長としての重責を荷った。由来、3代目というのは、個人としても、公人としても、何かにつけて問題が多い。当時、矢内原総長の許へ就任の挨拶に伺った際にも、いろいろのお話の末、そのことが話題に出て、小生は、どうも心配です、うっかりして生研の看板を斜にかけるとなるとは大変です、と申したことであった。事実、小生の在任中に、当研究所の将来に大きな影響を与える体の問題が相次いで起って、徒らに自らの微力を歯痒く思ったことがたびたびで

あった。

いま、当時のメモを開いて、3年間にどういう事柄について、自ら深く思索し、いろいろな教授方や文部省の人達と意見を交わし、また更らに事務長、その他と打ち合わせを行ったかと、記録を調べてみたところ、メモに出て来る回数が一番多いのは、何と言ってもロケット問題であった。これが延べ243回あった。ロケット問題は昭和30年1月11日に文部省に呼ばれて、岡野学術課長から話を聞いたのが最初である。以来、昭和32年3月31日、所長退任の日までの日数810日をこの243で割ると、平均、週に2回の割で、このことにつき、いろいろの人達と、何かしら、議論したり、打合わせたり、独りで考えにつまったり、していた勘定になる。ロケットに次いで、メモ回数の多いのは、配当定員問題の94回、東京に移るか千葉に建てるかについて72回、溶鉱炉65回、それと部門増24回の記録が目についた。

これ等の諸問題は、考えてみると、そのどれもが生産技術研究所の創設事情、ないし、根本性格と直接に関係のあることばかり。当研究所が設立後、日なお浅いための1種の過渡的問題とも見られるものであった。例えば、この内、小生が最も頭を悩ました配当定員問題の如き、今にして省みれば、結局、第二工学部という学部を廃止して、それより規模の縮小した生産技術研究所という、別枠の組織に転換するための、簡単には筋の通せない、一種の残留ひずみであったかとも思われる。東京移転問題は、そもそも、第二工学部が非常時代における、あるいは、余儀ない着想によって、遠い先ぎのことを考える余裕のないままに、大急ぎで設立されたところに遠因がある——そこまで、さかのほれば、さかのほることの出来る問題である。最近いよいよ東京移転が決定したことであるから、批判は避けるが、当時においては、果して是か非か、条件次第のことながら、思い悩んだことであった。

いずれにしても、これ等の諸問題の内、在任中、一応、片が付いたのは部門増の問題だけ。あとは、どれもこれも処置に窮したままの状態で、次の谷所長にお引継ぎ願った。甚だ意気地の無い次第であった。

学部として存続する方が宜かったか、研究所としての方に、より意義を感じるか如何か。これも客観的には、見る人によって、まちまちの議論が出、また、意見の別れるところであろう。そして、このことは当研究所の教官の心の奥底に、秘められた悩みとして、現在でもなお残っていることと思う。それは、当研究所の言わば痼疾である。

当所に属する教官の多くの方がたについていうと、それは、第二工学部創設の当時、実社会面でいろいろに活動されていた方がたである。その中で、特に教育に熱心な人達が、ここに集まって来た訳であるから、学生の教育に特別に深い関心を持つことは当然であった。それが、学部が廃止され、直接、学生の教育から離れて、研究所の仕事に転換せざるを得なくなったのであるから、そのことが、胸の内での何とも割り切れない、最も大きな、秘かな悩みとなった。それは正に当然のことであった。しかし、他方において、われわれは、当生産技術研究所を作るに際し、如何なる性格のものに仕上げるべきか、どんな内容の研究所が戦後の日本にとって最も要求されるか、それを十分に考えた挙句、今日の生研が出来上った筈であった。

いま、当所が創立10周年を迎えるに当って、これを省みると、当時のわれわれの考えは間違っていなかった。戦後、海外技術の導入によって、素晴らしい歩調で内容を整えたわが工業界は、今後も、その歩調をゆるめず、さらに進展して、海外の大工業と対等につきあうところまでいかなければならない。こうした本邦工業界の気運に際して、正に10年の経験をつみ、言わば油の乗った状態にある当研究所の存在は、真に幸であった。また、それだけに次の10年間における当研究所の果たすべき役割は甚だ重且つ大であるともいえる。小生は、生産技術研究所が、今の日本に、出来ていて、間に合って、本当によかったと思う。